

〔八雲御抄三下〕仙異名 九のかすみ をの、えのくつる所 山ちのきく是寄仙

〔藻鹽草十四〕仙氣形

山ちの菊これ寄 九のかすみ たちぬはぬ千これ仙也、又たちぬはぬ衣の袖しふれければ三  
あしたづにのりてかよへる又のりて行つるの羽かぜに雲は おの、えのくちし所これ王質と云  
人薪をこりに山のえのくちたりけると碁をうつ所へ行て一番をみける程に土に

〔萬葉集九〕獻忍壁皇子歌一首詠仙人形

常之陪爾トシヘニナツフユニヤカゴロモツギハナクサヤニスムヒト夏冬往哉カハゴロモツギハナクサヤニスムヒト裘扇不放カハゴロモツギハナクサヤニスムヒト山住人カハゴロモツギハナクサヤニスムヒト

〔古今和歌集五〕仙宮に菊をわけて人のいたれるかたをよめる

ぬれてほす山路の菊の露のまにいつか千年を我はへにけん

素性法師

〔奥儀抄下ノ上〕是は人の仙宮にいりて、ときほどと思ひけるに、千とせをへたることのある  
をよめる也、仙宮には、きくのおほかれればかくよめり、

〔拾遺和歌集三〕三條のきさいの宮朱后の、もぎ侍ける屏風に、九月九日の所、もとすけ

我やどのきくのしら露けふごとにくよつもりて淵となるらん

〔奥儀抄中ノ上〕仙宮の菊の露は、つもりて淵となるといふことのあるなり、

伊勢

〔古今和歌集七〕龍門にまうで、たきのもとにてよめる、  
たちぬはぬきぬきし人もなき物をなに山姫の布さらすらん

〔奥儀抄下ノ上〕是は龍門寺の仙洞を見てよめる歌也

〔夫木和歌抄三〕仙家

俊頼朝臣

たちぬはぬ衣の袖しふれければみちとせふべきも、となりけり

〔拾遺和歌集五〕亭子院歌合に

みつね